

言ひうるのである。おほかたそれが超俗・隱遁の境涯を諷詠するもの、即ち風流の道の本義とするもの、やうに説かれたのは、何に據るのであらうか。それには二つの理由を挙げ得るではなからうか。その一つは往昔俳諧に没頭した人々が、多く社會の第一線より退いた隱遁者であつたこと、次に俳諧發句そのものが激しき日本精神を詠むには、その器があまりにも小さ過ぎること、殊に俳句の形式などに於ては、日本精神を容易に詠み得ないといふ不自由を具へてゐる、の二つを指摘してもよいであらう。

これによつてこれを觀れば、俳句の形式の小さいこと、窮屈なことは、今更これをどうしようもない。われわれが進んで俳句と取組むからには、俳句の持つ形式を驅使して十二分に效を奏し得るやう、飽くまで努力を惜しんではならない。それから俳句精神の歪曲といはうか、偏跛な道を探つて今日に至つたといふことは、いふまでもなく故人がその罪の大半を負はなければならないとはいふもの、われわれが如何に故人の罪を責めてみたところで、どうにもなるものではないのだから、われわれはいち早く俳句の正道を理解し、それに向つてまっしぐらに進まなければならないのである。これが今日俳句するわれわれに課せられた、重大なる使命ではなからうか。

偉大なる國文學者芳賀矢一氏が英京倫敦に於て日本精神を講演せられ「日本文學の最も重要な特徴は何であらうか。我々の文學史を瞥見するとき、我々は少くとも二つの異つた特色を發見する。そ

れは凡ゆる形式の文學にも、また、如何なる時代の文學にも現はれてゐる要素で、その第一のものは「天皇に對しての忠義」であり、第二のものは「自然に對しての愛」である」と氣を吐かれた卓見は今日の國文學者をして絶讚措く能はざらしむるところである。

われわれ俳句界に於ては、日本文學の第一の要素を忘れてしまつたかたちである。或ひは忘れては居らないかもしれないが、結果作られた作品を見ると、第一の要素を没却してゐるもの、やうに見られても致し方がないのである。或ひは花鳥諷詠といひ、或ひは自然觀照といふ。實に結構な名前であり、且つ又さうした詠法が決して間違ひであると非難するものではない。芳賀矢一氏の言葉ではないが、實に本末を顛倒したことを遺憾に思ふ次第である。

かういふと一見時局便乘主義的な言葉にきこえるかもしれないが、われわれ日本人が日本の俳句を作る以上、日本精神を離れては俳句文藝が成立しないといふことになる。これは以て直ちに、勤皇精神に通ずるところであるから、今後は勤皇俳句も澎湃として世にまみえるであらうと推察される。

こゝに於て俳人に勤皇家が居らないといふこと、勤皇家に俳句を詠むもの、尠いといふことが、略理解されたではなからうかと思ふ。例外はあるにせよ、一般的に見れば、確かに大野氏の言はれるやうに俳人にして勤皇家たるもの、極めて尠い、否殆んど無いといつてもよいからであらう。従つて風流社會の一部に於ては知られてゐても、大きく日本國家より見れば、俳人たるもの、存在なぞ

どうでもよい、とまで痛罵されることになるのである。

この半面、俳句は日本独自の文學であり、世界に誇り得る文學であつて、今日日本人が世界に冠たる國民性を具へてゐるといふのは、實に俳句文學に負ふところ少しとしない、などと叫ばれてゐる。更に今日の爲政者は、日本人の精神文化向上に、老いも若きも俳句に親しめ、殊に大東亞戰爭遂行の今日は、銃後の國民たるものすべて、俳句を詠むくらの餘裕をもつて居らなければならぬ、と盛んに宣傳されてゐるではないか。

一見矛盾したかのやうに考へられるが、靜かに我國民性と俳句との關係に想を致すならば、成程と頷かれるであらうと思ふ。古來我國民性の特色と云はれる敬上性、感激性、正直性、信實性、現實性、樂天性、愛名性、潔白性、淡泊性、溫和性、愛自然性、同化性、諧謔性、幽玄性等は俳句の上に於て遺憾なく發揮されてゐるのである。例へばこゝに擧げた敬上性は、いふまでもなく忠義・敬神の日本精神であつて、往昔に於ても

元日や神代の事も思はるゝ

守武

蓬萊に聞かばや伊勢の初便り

芭蕉

などの句があるやうに、最初から俳句は幽玄・枯淡・飄逸を狙つたものではないのである。われわれ

は少し時間を費して、故人の俳句を一々検討して見るだけの餘裕があつたならば、俳句が崇神・忠義の心と切つても切れない關係のもとに存在してゐることを、充分に感得するものである。

徒に自然を愛することに没頭し、清淨なる自然に避難するかの如くに、自描然寫の俳句を以て俳句道の本領なりとするときは、さながら唐宋文人の後を追ひかけるにも似たやうなもので、模倣、没時代などといった嫌な誹りをも、うけなければならぬであらう。

それから生活俳句と稱する人々の俳句にして、自分の俳句が現實生活に則したものであるだけに、極めて新鮮潑刺たる事象を取り入れたかの如くに考へてゐる方が尠くない。其處には何か大きな忘れものをしてゐないだらうか。もう一度自分の俳句に對して、反省してみなければならぬものゝあることを注言したのである。

又外國文學を營養として、俳句文藝の發展擴充をはかることは結構であるが、外國文學に敬服し心酔して、日本を忘れてしまふやうなことがあつてはならない。古典俳句を輕視し、正視しない人々にこの傾向が強いから、こゝに警告する次第である。

言葉の肉

言葉はおのの生きた肉體を具へてゐる。又その肉體は部分々に應じて、それぞれの力を持つて

あるものである。従つて肉體上の平衡を缺いた言葉のつながりは、實に無様で見られたものではない。尙ほ又力の弛緩した言葉のつながりも、同様に無恰好なものである。

言葉の表面だけに氣を取られてゐると、裏面のことなどはすつかり忘れてしまふ。裏面を忘れたら、いふまでもなく言葉が持つ肉體や力を生かすことが出来ない。生きた言葉を用ひたい人、言葉を生かして用ひようとする人は、このぐらゐの心構へがなくてはならない。

言葉の持つ肉體のふくよかな部分を結合させること、そして言葉が持つ力の適度を計つて連繫させることは、言葉の利用は勿論、自分の句を生かす妙諦といはねばなるまい。

句作に際してはかうした煩はしい工作が、無意識のうちに取り運ばれるようにしたいものである。又さうならなければならぬ。それがためには眞摯なる句作精進に依るより他はない。

俳句傳統の美

世相が怒濤のごとき勢ひで變化しつゝある今日といへども、俳句本來の美はしい特性と社會共有の美はしい特性は決して喪はれてゐない。いや昨日よりも一層あらはに、いきいきとした姿を示してゐるともいへよう。それが見えないといふのは、實は自分を知ること、明瞭を缺いて來てゐるためであり、それと同時に日本精神の感度に、若干臃ろなものが附纏うてゐるためではないかと思はれる。これを

精しくいへば、現實に觸れて醸成される人間の愛情を、ひとしほ激しく掬むべきであり、それから日本傳統の徳性を高揚することに能ふかぎり豊富であらねばならぬといふことである。かくてこそわれわれが俳句に用ふる言葉や文字は、明日を暗示してゐる日本の軌道に乗り、又現實體得の血液を十分含んでゐることにもなるから、作者のこゝろと一體になつては、俳句がいつも新しい方向と新しい組織とを帯びてゐることになるであらう。所詮俳句に於ては、知識が第三第四の問題で重要な役割には決して參與しないのである。

俳句の推敲

誰れにも解りきつた話であるが、文章はさながら手紙のやうに、讀んでくれる相手を念頭に置いて書かれるものである。これにひきかへて俳句は、讀んでくれる相手を念頭に置いて作られるといふやうなことがない。文章に於ては、さあ、書きたいものを書かう、といふわけにはゆかない。讀んでくれる人が理解出来るか、面白く感じてくれるか、そんなことを考慮に入れてかゝらなければならぬ。そこへゆくと俳句は讀んでくれる人がどうであらうと、そんなことは問題でない。作りたいと思つたことを、何等の制肘もつけずに作り得るのである。

つまり文章は書くに際して、先づ讀者といふものを重要視しなければならぬのに反し、俳句は作

るに際して、全然讀者といふものを無視してゐる。更に精しくいへば、文章は第一に讀者を、第二に自分の書きたいと思ふことを書くといふ順序であるが、俳句は第一に自分の作りたいことを纏め上げ、第二に讀者のことを考へるといふ順序になる。こゝが文章と俳句に於ては、全然逆のかたちになつてゐる。それゆゑに文章家と俳人の悦びも亦、自ら異つてゐるといつてもよろしい。即ち文章家にあつては、自分の文章が如何に讀者から褒貶されるか、一に悦びはそれにかゝつてゐるのであるが、俳人はそれとはまるで異り、句を作ることそのものに大いなる悦びを得てゐるのである。

古來文章は書くもの、俳句は詠ふもの、と言はれてきてゐるが、成程その通りで、文章は巧みに書くことに主眼を置いてあり、俳句は作者自身詠ふところに主眼を置いてあるのだから、その心構に於ては自ら趣きを異にしたものがある。これによつても容易に察せられるやうに、文章家の努力は實に並大抵のものではないが、これに反して俳人の努力は左程の苦痛を伴はない。否苦痛どころではなく句作に際して常に欣びが中心となつて、句の構成を支配してくれるものであるとさへ云はれるのである。

この點から云へば、即ち藝術製作に對ふ心からみれば、俳人は實に恵まれてゐる。凡そ精神生活に於て、俳人は確かに苦勞を求めないですむ存在であると云はれるかもしれない。しかしそれだけに物質生活に於ては恵まれるところが少い。これは當然といへば、確かに當然なことに屬するといへよう。

若干の例外はあるにせよ、相手を主にする藝術と自己を主にする藝術に於ては、その結果に異つた事象の反映することが當り前であると云はねばならない。

ともかくも俳人はこのまゝでいゝだらうか。今言つたやうに始終自己満足の境地を放浪してゐるだけではないか、こゝが問題となつてくる。勿論それでいゝといふ人に對しては何も言ふべき言葉がないが、こゝまで徹底してゐる人は恐らく稀であらうと思はれる。大體言葉に表現することそれ自身が、讀者を前提として製作されたものであるといつてもよいのである。他人に見せる他人に讀ませる意圖がなかつたならば、文字に纏め上げる要はなかつた筈である、といはれてもいたしかたがない。といつてわれわれ俳句を作るものが句作に際して、最初から他人に見せる讀ませる意圖があつたかどうかといふことになる、そんな構へは豪も持合せてゐないし、句作の瞬間に於てはいつもそんな雜念の這入り來る隙がないのである。

かうして眺めてくると、俳句ぐらゐ純粹で生一本な文學はあり得ないといふことになる。句の産まれる動機たるや、全く純粹無垢な自己のあらはれである。それを形にあらはして訴へようとする。ここに於て俳句が藝術としての價值を持つことになるのである。

訴へることはいふまでもなく、他人に見せること讀ませることである。他人に見せる讀ませる以上は、他人によく納得のいくやうに纏めなければならぬ。こゝに推敲の必要が生れてくる。但し自分

の句を見てくれる読んでくれる相手の定め方如何によつて、自分の句の進歩と退歩が決定されるものであるから、慎重なる態度をもつてのぞまねばならない。

まさか神様を相手にして推敲するやうな人もあるまいと思はれるが、それかといつて俳句の何たるかも知らない童子を相手にして推敲すれば、これ又とんでもない句になつてしまふ。超人を相手にすれば氣狂じみた句になる恐れがあり、凡人を相手にすれば卑俗な句に陥る恐れがある。

相手を感じ嘆させようとするればそこに無理が生じ、殊更相手にわからせようとして力を抜けば、句が弛んでしまふ。何せよ我が身にそぐはない相手を求めることゝ、我が身とかけはなれた推敲をすることは禁物である。

推敲の相手には最も親しい人を選ぶべきである。その選んだ親しい相手が理解してくれる句、さうした句に纏め上げるやう推敲すべきである。

尊敬出来る俳句・俳人

一つの俳句を、假りに十人の俳人を選んで、しかも俳句に對して相當以上に理解ある人々に採點を依頼するとしよう。その結果はどうであらうか。恐らくは十人が十人各、異つた點數を附けるに相違ない。これほどかやうに俳句の批判は不確實である。もちろん俳句の文字が短かいために、かやうな

結果を招く大きな原因をなしてゐることは否めない事實であるが、その隙に乗じてか或ひは乗ぜられか、批評の側に立つ人が思ひつきの感想を洩らしたり、又は自派の俳句故に褒め、他派の俳句故に貶するといふやうなことにいたつては、愈、俳句の値が混亂してしまふのである。

極度に俳句の嚴肅さが失はれてゐる今日、馬鹿々々しい限りに愚弄されてゐるのは、俳句の修業者である。といつて、いやはや迷路の多い俳壇であると呆れることはない。何はともあれ尊敬の出来る俳句を探ることが急務である。さうしてその人の書いたものをじっくりと讀むことが肝要である。つまり自分自身で尊敬出来る句と作家とを探し求めることが第一で、周囲の事情に煩はされてはならない。とかく饒舌な批評家や利巧な俳人に惚れ易いから、其處に充分なる警戒を必要とする。手つ取り早く云へば、先づ尊敬の出来る俳句に惚れ、それから後さうした句を作る俳人に惚れることである。

風景美の捉へ方活し方

およそ風景美には平面美と立體美とがあり、また單純美と複合美といつたやうなものがある。勿論平面美のうちにも得難い美の潜んでゐることもあるから、作句化されたる場合、素晴らしい俳句を構成することもなきにしもあらずである。それから單純美はこの文字が示すやうに單純なる美はしななるが故に、一概にけなされ易い立場に置かれてあるが、幸運にも未發見の單純美を索りあてたやうな

場合には、これ又素晴らしい俳句を構成するものといはねばならぬ。しかしかうしたことは極めて稀で、求めて容易に得られるものではなく、千に一つか二つあるなしの僥倖といはるべきものであらう。

従つてわれわれが作句をする場合には、平面美や單純美を度外視してよいといふのではないが、それよりも立體美や複合美を十二分に活かすやう、大いに意を拂はねばならぬといふのである。出来ることならば平面美と立體美の交叉、そしてそこに生まれる獨自なる複合美を把握することに越したことはない。なぜならば平面及び單純なる風景そのものには、個性の及ぶ範圍も狭められ、さらに個性の力も微弱にしか作用しないからである。さうなると自然自己の生命がどれだけ句に入るか否か、問題となり、この點非常に考へさせられるところがあるではなからうか。

風景美そのものをよく考へてみると、平面のみに於て素敵な藝術を構成するといふことは滅多にない。例へば秋の溪谷に佇み、言語に盡し難い美にうたれたとしても、その場合溪谷そのものゝ流れ、又は水の色といったやうに、たゞひとつの平面的な美がわれわれの心を捉へたと言ひ得ないであらう。其處には必ず立體的なものが支配してゐたと云はねばなるまい。或ひは雲の動き、或ひは蒼穹の廣さ、或ひは空を侵してゐる樹々など、いろいろなものゝ直接間接美の均整のために協力を惜しまなかつたがためではなからうか。松島が日本三景の一つに數へられ、松島は實に風光の勝れたところと云はれてゐるものゝ、若し單に松の生えた島ばかりが竝んでゐるとしたらどうであらう。その風景美

は恐らくは半減どころでなく、もつともつと減つてしまふであらう。入灣の形も良く、往きつ戻りつする船もあり、恰好な旅館もあり、土地も起伏に富んでゐるなど、それはそれは多くの要素が相蒐つて松島の美を構へてゐるのであるといふべきである。日光・箱根等すべてさう言へるのである。

かうしてくると俳句に風景美を詠む場合には、たゞ一つのものに捉はれるやうなことがあつてはならず、先づ最初に美を構成する群像を、大掴みにしてかゝらなければならぬことになる。それからの中に美の中心を決めて、群像の頂點をそこへ結びつけなければならぬ。その場合には必ずしも世俗的なものを中心に置くとは限らない。作者と最も強く、最も親しく結びついたものを中心とするが効果的であらう。

つまり風景美の纏め方と活し方は、恰度建築のやうなものであると思ふ。建築が建築としての美を發揮するためには、たゞに家屋の美そのものばかりではなく、樹木、道路、界限の風景、土地の高低、山河の遠近などとすべての方面に環境美を活かさねばならぬと同様、俳句に於ても聯想美が自由に飛躍出来るやう、變幻美妙的な平面立體の複合美を内容としたいものである。かくてわれわれはよい建築には、整然とした律動を具へてゐると聞かされてゐるやうに、風景美の纏め方活かし方如何によつては、夢想だもしない交響曲風な都會俳句を作ること出来る、又牧歌風な農村俳句も作つてゆくことが出来るのである。風景美を奔放に生かさうとするならば、現實の風景に捉はれないで、直ちに幻想を

追うて地球美宇宙美へまで飛躍するがよろしい。風景美の限りなき展開こそは、やがて新しい性格の句を創り出すことにもなるであらう

俳句篇

野のひかり

郷里會津の春をたづねて (十句)

野火さかん幼きころさかんなる
山の紺こぼるゝに寺草萌えぬ
すゞめすゞめ連想の春行き暮れぬ
春の雪兒ねざらふ間の兒ごころを
ふるさとは老いず淡雪背に音す
ふるさとの野火の輪はわが子供なら
早春の雲あり秣搔くさしみ

馬のうしろいとこはとこの村春に
街のうへ早春なればふるさとよ
太陽は目高を追うて疲れるか
草餅を喰はむ子も山のあかね垂れ
山笑ふとき黒髪を梳く日射し
草萌える浄土なん龜仔こを負へる
山のいろ動けば板碑文字ぬく

回想

回想すふるさとの榎かき若葉群れ

懐郷にこたふる梨花の雲ながれ
兒の鼻のひなた櫻桃咲くしろき
山羊小山羊いつより餘花の月嗅ぎに
衣かへて行け太陽のいきほひに
わが背丈衣を更へて風に吹かれ
鯉の眼がたゞ寂びきつて日永なる
尼の聲つゞじに落ちて山うつろ
つゞじひらく日輪多摩の子が集ふ
柿若葉落日しきりに繪馬こがす
訃報ありあり枝蛙つれづれに

李若葉の陽をたくはへて佛畫垂れ

哀悼相内掬水氏 (二句)

君をかくす南部の霞霽るゝなき
春千々に掬水佛をおもんみる

花を見飽かず

野なでしこ學に溺るゝ瞳を嘲へ
笙しやうありあり新樹に朝の蟲集ふ
山五月鉦かね音に浮きゐる雲を祝いはぐ
童居つ風のなでしこ目に残る

なでしこに過去あるたつき窓ひらく
島若葉晝の會話を追ふものゝ
島の猫一つの雲と夕焼ける
蜂日和ふとはらかならの面輪など
父の肖像子の眸まあつめて梅雨に入る
梅雨の鏡小雛いくつも母に似る
さくらんぼ垂れ少年の瞳のつぶら
子の顔のさびしさまぎれ河鹿鳴く

妻庭喜藏氏を悼む

あなかしこ武藏夕焼すべもなし

今吉隆治氏の二女亡津紀子嬢へ供養す 於荏原留守宅(二句)

梅雨に入る言とゝのうて君を想ふ
童女の眼母の眼梅雨の花を置く

悠陽を惜しむ

言ひたらぬあした徹雨の甕とのみ
兒の告白かみなりの夜の疲れ
童子白壁へ七月の山もだす
夕虹の小徑化菩薩あらはれよ
遠はたゝ光れば部屋の反語むなし

江村の夕やけ誰れもお辭儀する
太陽がまはる親と子竹植うる
蛾狂ふ講義のこだまいとまなし
寺廟朝の陽ながら百合咲かす
摩利支天こゝだくの露と明け給ふ
月さしぬ揉上ゲの汗華と咲く

會津鶴ヶ城逍遙(二句)

城とかく馬のすかんぼ花ひかり
會津々々の歌に養虫老いもすれ

緑樹を求めて

會津柳津福満虚空藏尊 (三句)

うつゝなの朝山かこち白がさね
峯雲は佛とならん只見川
朴訥の聲追へ百合のひなたある

陶器名産の本郷にて (二句)

南風のしたゝか陶土昏れわたる
晝顔は吹かれ陶工いとまなき

ふるさとにありて (二句)

山の雲にせめられいつか晝寐われ
夜の秋、子を膝に父祖の血をおもふ

若柳にて伸艸氏に逢ふ (三句)

百合の白、空の白さが展がるを
青木賊しきりに穹を攻むれども
好意すぐに青田の風をいたゞきぬ

或百姓の女房、大鯰二匹をひつさげ川掃除せるを

夏川のめをと鯰に禪あるか

一關にて庭華、郷雨、空木、瓢山人氏等に逢ふ (三句)

水蜜桃つかみ蒼穹みとゞけよ

蠅一の二の陸中の月を得ぬ
うなづけばうなづけばよし扇置く

竹内直治氏と面談の時間も少く

餘情ともあれ道の奥の蚊に鳴かれ

松島・瑞巖寺など(四句)

人派手に夕霧ふ島せはしなし
ぬれ岩に鴉ひまなし葉月風
涼しさが減るとも岩屋佛佇つ
かなくの松みなすわり僧來べし

花風氏扇を出してこゝに華やかなる句をと所望されたれば、

美はしき想ひ重ねぬ花氷

島は無心に

雲来れば雲去る秋に身をまかす
今朝の木々たよるともなく身は秋に
誦經洩るゝまゝなれ天の川に佇つ
萩の山少年風を蹴つてくる
わが運勢秋立つ風をみとどける

直ちに筆を執りて書きつけたり。これ旅中八月四日の夢にて、目覺むれば枕元にこの句書き記しありたり

葭汀・温々氏と江之島を歩く(五句)

蟬一つ島の神、島おもんみよ
秋は島に来るもの雨にすねられる
美女柳わらはべの海かたむきぬ
美女柳雨あそぶ島うつらうつら
宮柱見まもれば島鳴るものを

小野寺仲艸氏御令息の結婚を祝ふ

天つ日のしたゝかめをと松ぬくき

石田溪花氏御令娘の結婚を祝ふ

旭はさらに涼しあれく雲に添ふ

大虹に君ゆくところひらくべし

小野文青氏の新生活を祝ふ

ふるさとの空

父の命日秋果つむべき穹ほしく
赤とんぼ忌日の空を西へ行け
會津さらば鬼灯の風ひとにぎり
古い街秋晴れと思ふ鳥來鳴く
籠の栗會津の光りたゆたへる

東山温泉(六句)

秋の雲あめふり瀧を置き去りぬ
こけし買ふ山の秋風ふところに
瀧の聲しづむ山とよいぼむしり
あきつむし會津の山の雲閉ぢる
日蝕す國訛りから秋の風
小鳥來ん山のおぼこの水かがみ

清水瓢太郎氏大尉に進級さるを祝ふ

秋光は竹のぼり君がかんばせや

山本紫龍氏御尊父を失はるを悼みて

萩は月にぬれたるまゝに悼句われ

清韻錄

羽越鷹ノ巢仙郷 (五句)

鮎下れ水の音たゝむ水の青
秋の聲山々のだつ陽がはしる
秋の風山彦峯をとゝのへる
石たゝき深山みやまの日向孕ますか
どんぐりのその山ごころふくるゝを

越後瀬波海岸 (八句)

ことゝへば蟲や瀬波の砂ありく

磯馴松そなれまつそゝとかはたれ草ひばり
ともすれば瀬波夕焼髪透かす
松の實は瀬波のあはれさゝへる
天高し兒等に熱泉そゝりたつ
濱葡萄誹謗に堪へてゐる日和
秋落日松葉囓む子等よくふとる
あめつちの瀬波ぬくとさ地曳ひけ

前田芳明氏の御結婚を祝ふ

對扇かさなり菊花かぐはしき

激しき天に

伊豆下田に吉田松蔭先生を偲ぶ(二句)

志士叫ぶ聲なれ波濤日短かき
志士あはれ冬の天日呼べば鳴る

吉田松蔭先生禱寓の家にて(二句)

志士像に竹のぬくさを言ひ合はす
要塞はきびし茶の花きほひ咲く
けざやかに海兵來つゝ蜜柑垂れ
馬召され山茶花の白いちじるし

こがらしはいつまで羅漢頭をさらす
 こがらしは今し逆光峯を消す
 國寶佛白山茶花の陽がすべる
 時雨ふと壁の落書むしばまれ
 誰か來ん月光やがて落葉鳴る
 機燈あれ野分はやくも海へ去る
 炊煙漂々浮寐鳥などうごく
 大日輪人去れば直ぐ落葉鳴る

日米英宣戦布告さる (三句)

魂叫ぶ聲なん冬日握ぎるまゝ

今が今民一億の冬日濃き
 一億が誓ふ實萬年青いち赤き
 兵馬發つ炊煙ゆたに日短かき

初富士

三浦三崎に初富士を拜む (十六句)

今日初日まぶしく思へ島殖える
 初富士に兩手透かしてつゝがなし
 合掌す冬の海に珠鳴るごとく
 初富士へ海はひかりを積んでゐる

はらからは捷つ初富士をおもひ捷つ
 初富士のゆとり蝟壺かはくのみ
 悠久の富士は初不二いくさ知れ
 初富士の下の海原風はじく
 初富士へなびくものなべて神業か
 沖津島初日まつりの雲あゆむ
 夷風初富士影につしめる
 みそさざい林を透けばけさむくて
 霜晴れの濱唄やゝに龜うごく
 島の朝鳴るが葉牡丹おもねるか

水脈ひとすぢに初富士は動くなし
 海に海風水仙に富士あらはれぬ

追風を身に

冬椿あらゝぎの雲へ鳥翔けん
 寒椿農婦寂光よりきたる
 寒椿山籟につまるとわれ
 冴え返る明星きつい號令す
 この梅花またも赤道おもんみる
 少年の赤い帽子と海ぬくゝ

春の雪埴輪の目元白くなる
日章旗冬の陽は朝はこゝにある
かへりみる板碑ぞ青く冬日立つ
鳶の笛雪解の城を動かすか
大佛は雪解あかりをほしいまゝ
わが生理つたなし櫻返り咲く
佛壇の明暗に慣れ風邪うとき
刀振れ寒鳴るまゝに暮光切れ

新關一杜氏に長女生るゝを祝ふ

雪は華こよなく幸のふくるゝを

左近允峰月氏におくる

君すゝめ大き仕業に冬晴れん

横田朱凍子氏の入隊を祝ふ

寒木の朱き陽かぶりかぶり征け

明珠をさぐる

大捷報杉脈うつて木の芽吹く
ますらをの塑像しかと春日踏め
大捷報歩々あきらかに東風來たれ
照空のいきほひ木の芽しかと立つ

白晝の人の氣はひに木の芽立つ
 子の指紋われに似てくるあたゝかさ
 淡雪に兒のあこがれが夕焼けん
 山靈を追ふ風よろし草萌える
 母を待てばこゝろをさなし春の雪
 枯木空ためらふ試問はしまりぬ
 教へ子の恭謹梅にいとまなし

末の妹の結婚に

妹嫁げ今白壁に梅ひらく

飄太郎氏女兒をもうけらる

梅ひらく空からをさな聲こぼれ

山に應へつゝ

四月二日巢鳩氏と日光中禪寺湖へゆく（八句）

祖國春を傲りみづうみゆたかなる
 うらうらと山の旗音はしるのみ
 山籟は雲ひとひらのあたゝかさ
 山彦に山惜しまるゝ春日濃き
 男體山は揺れん桐の實空ラ鳴りに
 まぶしさの春山靈を呼べばとて

鐘は春絢爛の氣にうたるゝを
菜の花の一線あかり鷺下りる
春の雲浮け女わらべよ男わらべよ
村旗一つ春の雲から鳥來たれ

輝ける風

兒の伸びの新樹亭々うるほひぬ
郭公鳥邑浮かびくる寂光や
松の芽のさみどり戦果重ねゆく
轉れば水韻そゞろ鯉そだつ

芽柳に征かん宮の陽五指にあふれ
皆働の氣せまり桐の花垂れる
法鼓たゞ春の浮雲ひろげぬつ
海の霽れ東風のまにまに村旗立つ
神官は山統べるかに囀りぬ
勤勞の顔いつまでもつゝじ咲け

—(終)—



續俳句教書

定價 金二圓六十錢

昭和十七年十二月十五日初版印刷
昭和十七年十二月二十五日初版發行

〔初版刊行數〕 2000部
〔出文協承認〕 ア190186號
〔出文協會員〕 116061番
〔版權所有〕 1052602號



著者

加藤 紫舟

發行者

東京市豊島區雜司谷町七ノ一〇二六
志水 松太郎

印刷者

東京市豊島區雜司谷町七ノ一〇二六
志水 松太郎

印刷所

東京市豊島區雜司谷町七ノ一〇二六
大日本出版社印刷部

日本出版文化協會會員第一一六〇六一番

東京市豊島區雜司谷町七ノ一〇二六

發行所

大日本出版社文藝部

振替 東京 二二一三三四番

電話 大塚 二九一六番

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元

日本出版配給株式會社



著者は——名は中庸、紫舟並に黎明居と號す。

明治三十七年奥州會津に生る。小學校在學中より俳句を好み、後早稻田大學附屬第一高等學院に入りて早大俳句會を興し大學部に入りて俳句雜誌「黎明」を創刊し今日に至る。早大在學中に「戀愛俳句集」「俳句三十講」「芭蕉燕村子規の俳言」を著はし、卒業後は新藝術俳句の唱導と研究等に没頭し、新聞雜誌に俳句と文章を發表する傍ら、「禪之生活」「口」「國民書道」等其の他諸雜誌の選句に携はる。その間の著書に「新選俳句季語辭典（四冊）」「森林」「俳人芭蕉傳」「芭蕉夜話」「感情のけむり」「俳句藝術論」「俳人蕉村全傳」等あり。希望者へ本書にサインを爲す、返送料要。

句集」「俳句三十講」「芭蕉燕村子規の俳言」を著はし、卒業後は新藝術俳句の唱導と研究等に没頭し、新聞雜誌に俳句と文章を發表する傍ら、「禪之生活」「口」「國民書道」等其の他諸雜誌の選句に携はる。その間の著書に「新選俳句季語辭典（四冊）」「森林」「俳人芭蕉傳」「芭蕉夜話」「感情のけむり」「俳句藝術論」「俳人蕉村全傳」等あり。希望者へ本書にサインを爲す、返送料要。

著 名 の 評 好

志水松太郎	市山盛雄	伊藤秋次郎	後藤朝太郎	吉原敏雄	吉原敏雄	加藤紫舟	加藤紫舟	加藤紫舟	加藤紫舟	桑原春晃	五來要人	八木東作	松本清	小澤滋	小澤滋	松石治子	松石治子	八木梯二	八木梯二	八木梯二	市川源三	平尾道雄	松井如流	
出版事業とその仕事の仕方	新時代のその仕事の仕方	婚期の娘持つ親の結婚の文教	茶道観支那歌行	概観	初心から名歌まで	蕉村の心	芭蕉の心	續俳句	初心から名歌まで	海	歐羅巴の黄昏	歐羅巴の黄昏	日本兵食史	日本兵食史	日本兵食史	幼稚園の食育	幼稚園の食育	實際の教育	實際の教育	實際の教育	略書	略書	陸軍の始末	書論
魂	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	
二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	
二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	

大 日 本 出 版 社 文 峯 莊 刊 行

432
155

終

